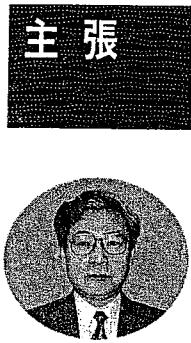


【資料一七】水環境はみんなで守る強いシステム

大阪経済大学

日本下水道新聞(平成11年6月22日)



大阪経済大学  
教授  
稻場 紀久雄

なつて下水道機能を守ること、流さないよう回収に努力する。この行為は市民の根付き、技術システムがそなつてある。この行為は市民のそれを支える。  
算的で賢明な「みんなの」とって耐え難い苦境だから、行為を支える役割に徹する。かく下水道施設への負担を減らすのである。そこでは、「少なくし、自分達より下流の者」といった悪意は、域の人々に配慮し、水の大漂わない。水を回復させるべきを思つて自然的に行う場として信頼される下水道へとしての自然で暖かな行為である。  
生命の水 松尾氏は、「など現実的で、そのまま現地だからこそ、ディスクポーラー達が入っていく。」「まことに現地だからこそ、ディスクポーラー達が入っていく。」「まことに現地だからこそ、ディスクポーラー達が入っていく。」  
松尾氏は、「など現実的で、そのまま現地だからこそ、ディスクポーラー達が入っていく。」「まことに現地だからこそ、ディスクポーラー達が入っていく。」「まことに現地だからこそ、ディスクポーラー達が入っていく。」  
松尾氏は、「など現実的で、そのまま現地だからこそ、ディスクポーラー達が入っていく。」「まことに現地だからこそ、ディスクポーラー達が入っていく。」「まことに現地だからこそ、ディスクポーラー達が入っていく。」

II 再論・松尾論文のアンチテーゼ II

**水環境をみんなで  
守る強いシステム**

命の水

### 人工構造物

後の最後のエンドオブパイ  
受けける主体は「みんな」で  
後は「政治家に他へておこなはれ」という形で、民衆は「みんな」で  
受けける。社会を構成する人々の個人が成功したために  
考へている(脚)。水の系  
みみんなでその機能を支えるのは、社会が強くなくなる  
における環境保全の最後のべきものである。こうして「なら」社会が弱ければ  
皆としてエンドオブパイ  
考へた立つ限り、松尾氏の力と報酬は多数者でなれば  
處理の役割を果たす社会的  
のつなり、「エゴイザル論は  
施設はどうしても必要にな  
出來ない。もっと厳しく  
考へてみると、アフレク首相の「強い社会」  
るし考へてある。」  
この考へ方、ある種の口  
この考へ方、ある種の口  
これらの成熟社会で  
められておつたるか。「みんな

水文化の基礎  
木の汚れを少なくするため  
「水切り袋を流しの三角」  
ナーや排水口に付けて努  
めている。こども油を  
会では水文化が市民社会に  
普及して、暖かく、  
人間的な意識を育むもので  
なければならぬ。成熟社  
ティスボーザーの  
民の意識が水文化をささや  
く、「みんな」の意識を破  
壊する。現在多くの市民は  
誰にも命令されざるに排  
糞の技術は、こじらう意  
識と表裏をなして、暖かく、  
を廃棄物問題の総  
策の中で考えたい。  
球温暖化防止やダ

命の水」であ

構造物  
境ホルモンが下水処理場で  
効果的に削減できるようた  
る点から考  
察していくと聞く。

ディス旁一論議の掲載	
昨年11月9日付別刷	松尾 紀久
今年2月1日付4面	稻場紀久
〃2月8日付2面	亀田 泰司
〃3月29日付11面	松尾 友也
〃5月17日付15面	水谷潤太郎
〃6月8日付2面	神林 章